

## 佐賀の果樹11月号(病虫害防除)

<果樹類共通>

### 果樹カメムシ類

今年は果樹カメムシ類の発生が多く、特にチャバネアオカメムシだけでなくツヤアオカメムシの発生割合が高くなっています。チャバネアオカメムシは晩秋期には果樹園等から越冬場所(山林の落葉下)へ移動しますが、ツヤアオカメムシは常緑樹の樹冠内で越冬するため、遅くまでカンキツ類の果実を加害する可能性があります。もしカメムシ類の発生を確認したら、早急に防除を行ってください。

<露地カンキツ>

### 果実腐敗

今年は夏季の高温乾燥とその後の降雨により日焼け果や裂果が多かったため、それらの果実は収穫物に混入させないように注意します。また、一見健全そうに見える果実でも、果皮の細かい傷などから腐敗へつながる可能性がありますので、選別や防除等の対策をしっかりと行いましょう。樹上の裂果等に緑かび病が発生している場合は、そのまま放置していると菌が飛散し園中に蔓延してしまうため、園外へ持ち出し、適切に処分してください。なお、収穫の際は果実に傷がつかないように、丁寧に取り扱いましょう。

薬剤は収穫の7~10日前に① [ベンレート水和剤4,000倍とベフラン液剤25 2,000倍の混用]、② [トップジンM水和剤2,000倍とベフラン液剤25 2,000倍の混用]、③ [ベフトップジンフロアブル1,500倍] のいずれかを散布します。①、②では、トップジンM水和剤またはベンレート水和剤を先に溶かし、ベフラン液剤25を後で溶かします。逆の順番で溶かすと、沈殿を生じてしまいます。

薬液が霧状になるノズルを使って果実一つ一つを薬液で包み込むように丁寧に散布してください。

### ミカンハダニ

この時期はオマイト水和剤750倍(温州ミカンでは収穫7日前まで使用可、その他カンキツ類では収穫14日前まで使用可)を散布します。薬液の散布むらがないよう、丁寧に散布して下さい。

もし、オマイト水和剤の収穫前日数を過ぎてからハダニ防除が必要になった場合は、他の殺ダニ剤を散布します。ただし、他の殺ダニ剤は夏季の重点防除時期にも使用するので、ミカンハダニの殺ダニ剤に対する抵抗性発達を防ぐため、園内をよく観察して極力オマイト水和剤で対応できるよう努めてください。

<ハウスミカン>

## ミカンハダニ

ビニル被覆1ヶ月前を目安にマシン油乳剤97% 200倍またはエコピタ液剤200倍を散布します。エコピタ液剤は効果を高めるために1週間から10日間隔で2回散布してください。両剤とも散布むらが無いよう十分量を丁寧に散布してください。

ビニル被覆直前、直後にはコロマイト水和剤2,000倍、オマイト水和剤750倍、モレスタン水和剤1,000倍等のいずれかを散布してください。

## <ナシ>

### 黒星病・炭そ病

黒星病は10月中旬から11月中旬頃にかけて鱗片に感染し、翌年の伝染源となります。越冬菌密度を低下させるため、この時期にデランフロアブル1,000倍を散布します。炭そ病対策としても有効です。

また、黒星病や炭そ病に罹病した落葉も翌年の伝染源となりますので、園内の落葉は園外へ持ち出すか、土中にすき込むなどして確実に処分しましょう。

### 白紋羽病

樹勢が低下し、早期落葉する樹は、白紋羽病に罹病している恐れがあるため、休眠期に確実に処理ができるよう、樹に目印をつけます。

発病樹には、休眠期にフロンサイドSC500倍を1樹あたり100リットル灌注処理します。ただし、白紋羽病の症状が激しく樹勢の低下が著しい場合には完全な樹勢回復は見込めませんので、植え替えを検討します。

また、白紋羽病菌は発病樹を中心に土壌伝染するため、発病樹周辺の樹は見た目健全であっても感染している可能性があります。発病樹周辺の樹にはフロンサイドSCを1,000倍で灌注処理します。

## <キウイフルーツ>

### かいよう病

かいよう病は、収穫後からの防除が非常に重要です。収穫直後にはICボルドー66D 50倍等を必ず散布してください。なお、かいよう病の病原菌は傷口等から侵入するので、落葉や剪定作業などのように樹に傷を生じるようなときには必ず防除を行いましょう。

## <ブドウ>

### ブドウトラカミキリ

10月までの防除を逸した場合は、11月上旬までにトラサイドA乳剤200倍にプラテン80 800倍を加えて散布します。枝にしっかりと薬液が付着するように、十分量を丁寧に散布してください。